

昭和十年五月廿三日第三種郵便物認可(毎月一四一五二號)
昭和二十八年四月二十八日運輸省特別取扱承認第三五二號
昭和二十八年一月廿五日印刷 昭和二十八年二月一日發行

第十九卷

二月號

淨

土



二月號

道久

釋尊は法とともに

釋尊の常侍者阿難は、釋尊が齡八十に及び身の衰へたるを見て入滅の近きを憂へてゐた。阿難等弟子たちは釋尊をたよりとして法を求め、しかも未だ明らかでない。今もしもの事があれば我々はどうなるのであらうか。この不安に對して釋尊は次のやうに答えたまふた。

「では阿難よ、比丘^{びく}たちは今さら私に何を期待しようとするのか。私は内外の區別なく残る所なく法を説いた。この如來^{にぎはひ}の法には、或るものを弟子にかくすやうな教師の握拳^{あつけん}（故意に教へぬこと）はない。『私が比丘たちを導くのだ』とか、『比丘たちは私を頼つてゐる』とか、私は思つたことがない。問題は私でなくて、私を通じて明らめられた法そのものなのだ。

阿難よ、今まででも、又、私が死んだ後でも、自らを燈明とし自らを依り所とし、他を依所とせず、法を燈明とし、法を依り所とし、他を依所とせずに生きてゆくがよい」

（大般涅槃經より）

淨土二月號 目次

こゝろの溫まる話……………吉田絃二郎(1)
秩父宮の信仰的御生涯……………佐山學順(4)

讃岐の寢釋迦……………細井照道(12)
お釋迦様の鼻くそ……………藤田寛海(26)

名士かく思いかく望む……………龜井勝一郎(7)
訪問……………一瀬直行(24)

体内の灯……………東山未知夫(29)

創作 吉水……………藤井實應(17)

阿彌陀經の話……………編輯部(21)

學校探訪 芝高等學校……………趣味 現代短歌……………(11)

土にしたしむ人……………表紙繪「飛天」について……………松濤達文(3)

隨筆……………鬼はどこに……………(28)

古寺めぐり 東京芝 辨才天堂……………行方正明(14)

表紙挿繪……………松濤達文・芝園だより



こゝろの温まる話

吉田 絃二郎

朝、佛間に坐つてゐると軒端近く目白の群が來て鳴いた。目白が來るやうになると山椿も咲き、水仙も咲き、やがて梅もほころびる。

寒さはいさゝか閉口だが山椿が咲き、梅が咲くころになれば日本に生まれたことをこの上もなくありがたいと思ふ。

冬の朝の目白の聲のよさ、笹鳴きする鶯の聲のよさ、山椿の花のよさ、梅の花のよさは所詮東洋的な幽玄そのものである。

わたくしのやうな人間はいつも、何時死ぬるかも知れないと思つて庭をながめてゐるので、山椿を見ても、梅を見ても、目白を聴いても、一しほそのよさが身にしみ

て感じられる。もしわたくしが孤獨でなく、健康であつたなら、わたくしは、梅のよさ、目白の聲のよさも感じることなく過してしまふであらう。

わたくしの近所に「國光園」といふすばらしい庭園がある。五六千坪の園内いつばいに逸品ぞろひの盆栽が並べてある。園主のT氏が金に飽かせて蒐集したもので、一鉢百萬圓といはれるものもある。盆栽は錦松、眞柏、楓、松などわづか二三尺の枝幹に千年の姿を見せて、峻嶺の風雲を呼び、幽谷靜淵の聲を聴かせる思ひがする。T氏は庭園技師や數人の園丁たちとともに毎朝五時に起きて、終日幾千鉢の盆栽の手入れをつゞけて行つた。

T氏にとつてはそれらの盆栽は命ともかへがたいものであつた。

終戦後T氏は「國光園」を進駐軍の將校たちのために解放した。

するとT氏はこゝに一つの興味ある事實に氣付いた。

進駐軍の將校たちは毎日盆栽を見にやつて來た。盆栽はみんな二尺五寸ばかりの台の上に置かれてあつたが、將校たちは立つたまゝ盆栽を見下して

「ワンダフル!」(すばらしい)といつたが次ぎにかならず「ハウ・マッチ?」(いかほど?)と問うた。

しかしフランス人だけは別であつた。

フランス人たちは盆栽の前に立つて先づ腰を屈めて、

盆栽の台と自分の眼を同じ高さに置くことにした。かれらは大きな木を下から見上ぐる姿勢をとつて盆栽を觀賞したのであつた。すべてのフランス人がほとんど例外なしに腰を屈めて盆栽を見たのであつた。

自然を見るにしても、人生を思惟するにしても、立つたまゝでする人と、腰を屈めてする人とがある。自然に

對し、藝術に對し、宗教に對し、すべての美なるもの、眞なるものに對し、腰を屈めて味識せんとするフランス人の態度には學ぶべきものがあると思ふ。

わたくしは去年、淺草の淺茅會の人たちに頼まれて「淺茅ヶ原」といふ舞踊の台本を書くことになり、たびたび淺茅會の人々の來訪を受けた。その間に、あの社會の人々の持つてゐる眞人間的な心のあたたかさについて知らさるゝところがあり、下町の庶民的な傳統の持つよさを感じることができた。その一つの例として葬ひの話がある。

或る時(同業者であらうか)M氏がにわかに死んだ。たゞ一人の若い娘さんと女中さんのみを取り残されたが葬いを出す金もなく、娘さんは組合の人たちに泣きついて來た。それといふので組合の婦人たちはM家に駆けつけて、手を分けてM氏の計をつたへる者、玄關の應待に當る者と役を決めた。

「娘さんにお金が集まるまでは海苔卷一つ出す必要は

ないといひつけといて、それから玄關の受付に立つたの

ですが、一々弔間のお客さまの目の前で、香典包みを開いて見て、あなたはこれでは少い、せめてこの倍にしてお下さいと頼むのです。頼まれた方でも、あゝさうですかといった調子で、よろこんで香典を増してくださるのです。それでお葬ひも出せる見當もついたので、娘さんにいひつけて、さあお客さまにはお酒も出せといふ段取りになり、お葬ひも無事にすみ三萬五千圓の金が残りましたので、それはみんなMさんの家の電燈設備に使ふやうにしました。ところが娘さんがまた駆け込んで来て泣いていふのです。Mさんの家では香典返しもしない。まるで博徒のお葬ひのやうだといつてゐる人があるんです。て……と、かうなんです。そこで世話人が納まりません。いつたいそんなわからぬことをいふのは誰だい？ わたしたちが行つて取つちめてやるといふさわぎです。まつたくわたしたちの社會は面白いでせう」と御來客の一人が笑いながら語るのであつた。

この話を聽いてわたくしは梅が咲いたやうな心の温ま

る思ひがした。

表紙繪「飛天」について

松 濤 達 文

表紙は淨土を象徵する意味で散華する飛天を畫いて見ました。

法華經第五如來壽量品に

「我が此の土は安穩にして天人常に充滿す。園林諸堂閣は種々の寶を以て莊嚴し、寶樹には花菓多く衆生の遊樂する所なり。諸天は天鼓を撃ち常に衆の伎樂を作し曼陀羅華を雨降らし佛及び大衆に散す」

とあるやうに天人は淨土で天樂を奉じ、天華を散らし、天香を薫じて佛事を隨喜し讚嘆するのであります。

古來より印度を始め東洋各地に繪畫に彫刻に多く天人が表現されて來ましたが、私はそれを現代の人々のセンスに合ふものにするやうに單純化しつつ何度も何度も描き、消しては描いて苦心しましたが、中々思ふやうにいかないで、よわかりました。原畫は藍色と、朱の淡彩を用ひましたが都合により表紙のやうになりました。

秩父宮の信仰的御生涯



佐 山 學 順

今から廿年前の事である。本山布教にて福岡教區に巡教中、甘木町淨土寺香月大光師より秩父宮に關する次ぎの事を拜聞した。

香月君はいふ、先般太刀洗飛行場の横山聯隊長が突然拙寺に參詣された。其時の聯隊長はこう言つてゐた。秩父宮が三週間見學中、

いろいろと御指導申上げた事であるが、休憩時に上衣を脱がれた時腕に珠數をかけて居らるゝ姿を見て、驚き且つ感心した。伊達や遊戯に珠數をかけらるゝものではない。而かも若い宮様でありながら尙この態度を持せらるゝ、矢張り信仰の御方だと拜察した。翻つて自己を反省してみました、勿論身は軍人として總てを國家に捧げた身であれば、特に飛行隊の身は、不惜身命の信仰が根本である。然るに、妻子眷屬のある自分は、我執と愛着に悩みが深い。何とかして、心から、奉公の信念を持たねばならぬ。爾來、其信念を固める

爲め、日曜には、佛書を拜讀し、神社佛閣を參拜する事にした。本日御縁あつて本寺に參拜し、佛教のお話を承つて修養に資したいものだ。と言つてゐたとの事である。私は 秩父宮と珠數の話を聞いて同信同行の親みを覺えた事であつた。

更に香月師はいふ、秩父宮の御宿所は久留米の素封家石橋家であつた。七月卅一日より八月廿日迄三週間の御滞在であつた、御着の翌朝、石橋家主人が、朝の御挨拶に伺候しますと、いとも御機嫌よく、御受けになつて、「當家の佛壇に案内してください」との仰せである。石橋主人は、驚きと狼狽、そして困つた事になつたと思つた。それも道理である、宮様の御成りといふので佛間は、諸道具を入れて物置同然、亂雑になつて居る。かといふて拒むわけにはゆかない。「少々御待を願ひます」と急ぎ勝手に來て、佛間の整理に總がゝ

りで、一應の掃除が済み、恐縮し乍ら 宮様を御案内する段取となつた。

主人の案内により石橋家の佛間に来られた宮様は、敬虔な態度を以て、正面に端座し禮拜をなされた。後に控へた石橋主人の眼からは感激の涙が落ちた。その筈である、宮様が正面の佛様に禮拜された事は聞えるけれども、佛壇の兩側には、親先祖の位牌が祀つてある。石橋家の位牌を上座にして、玉葉の御身が、下座より禮拜された事は、何といふ勿體ない事であろう。親先祖は、嗚かし草葉の陰に感泣して居る事であろう。かくして秩父宮は石橋家御滞在中毎朝佛間にお入りになつたといふ。石橋家は久留米の巨利、梅香寺檀である。爾來、一層敬神崇佛の家風を新にしたといふ事である。

更に秩父宮は其後、再び九州に來られて、鳥栖町淨土宗光明會館にお出でになつた。

二日間の御滞在の宿舎として適當の宿がない。恰も光明會館の新装成りて、お宿に相應はしい事を當局の人が聞きつけて、宿泊所の交渉が始められた。難點は玄關より本堂の佛像が見える事であつた。幕を張る、張らぬで異見が出た。結局會館側の主張通り其儘として御迎え申上げる事となつた。愈々其日が來た。主任の先導により玄關より座敷へと御案内せし所、再び御戻りになる。主任及び隨行の人々も、突然の事として胸のどよめきを覺えて居る間に、御身は玄關を通りすぎて、本堂に足を進められ、恭しく佛前に立禮遊ばし

たとの事である。光明會館主任及び信徒は如何に喜こんだ事であつたろう。

二日間の御滞在中、毎朝、佛前に參拜、經机にありし光明歎德章を讀誦されたとある。お菓子が出れば、佛様に御供したか、今朝の供前の献花は見事である、など、細心の注意が拂はれたといふ。光明會信者の令嬢二人、御給仕に奉仕した所、殿下は「あなた方は光明會の信者でせう」との間に、「ハイ」と答へたら、「矢張り信仰の道に志すものは、どこか起居振舞に、違ふ所がある。敬虔な日本婦人の美德を一層發揮する様に」と言はれ、大いに面目を施し、同信同行も無上の喜としたといふ事である。

其後淨土宗特命布教で古河の小學校で講演、秩父宮の御事を演べた。後に控室に尋ねて來たのは青年教師林某氏である、私は秩父宮の從卒をして居りましたといふ。珠數の事を聞いたら常に御用になつて居るといふ。更に、武官の本間中佐、(後に戰犯死刑に處せられしヒリッピン司令、本間正晴中將)は、大の日蓮信者で共に珠數を離さず、時には佛教信仰の話に花が咲いたといふ。

林君の話によれば、宮様は實に平民的で、且つ我等兵隊の事を勞りくだされし事を難有く思ふて居る。それに秩父宮様にあやかつて我等平卒間に親孝行會を組織しました。其要項に「親を大切にすること、歸宅の節は十分間以上、親の膝下に待り、親を慰める事」となつて居ます。秩父宮様は、御用命の旅から歸られると、宮中に、御

復命の後には、必ず御母君、貞明皇太后様の御殿に訪問され、渺くとも二時間以上は、四方山のお話の中に、御母君を慰め給ふた。時には、日の暮るゝをお忘れになる事があるといふ。兵卒も此事を承りて自らを反省して、一時間二時間は及びもないが、せめて十分間以上親を慰むるといふ誓約をしたそうである。林君又曰く、

麻布の聯隊から時には、徒歩で、御殿に御歸りになる事がある。

態々横町を通られ、途中、小供が遊んで居ると立止つて、子供等の頭を撫でては、立派な人になるんだよと勵まされた。子供等は、宮様と知る由もないから、あの兵隊さん、僕の頭を撫でた、いやな兵隊さん、位のものであつた。誰いふとなく、秩父宮様だといふ事が判つて、撫でゝ貰つた子の親は今更乍ら光榮の喜を感じ、未だ撫でられない子の親は隣組で申合はせ、宮様の、お通りになる時刻を張番をして知らせ合ふ事にして居つたとの事である。

古河より下妻町に巡教して、信用組合樓上に講演し、秩父宮の御高徳を讃へた。それから一ヶ月後、茨城教區教務所長下妻町光岸寺大谷智月師が、下谷西念寺に來られた。大谷師はいふ、巡教の後、偶然にも秩父宮が下妻の沼田家に御宿泊されました。沼田家にてはこの沙汰を承つて、主人は、秩父宮殿下の佛壇御參拜の話を聞いて居たから、早速宮内省に伺を立てた處、御名代の宮様となられてからは、臣下の佛壇へは御遠慮遊ばすと承つて居るが、然し宮様の事ゆゑ、何時御下命があるかも知れないから用意だけしておく様にと

の注意で、更に、秩父宮様は、皇居と、伊勢神宮の方向に、足向けられないから、寢所も注意する様との事であつた。秩父宮は秋の大演習、東軍駐在審判官として下妻に滞在せられ、町民の喜は限りもないものがあつた。奉迎の提燈行列、沼田家の前に來たとの報知があつた際、食事を中途にして國民の誠意を受けられたとある。庭を散歩されては、自ら履物を直され、食事は簡單なるものを注文され食事後は御自分で次ぎの間に運ばれた。

態々二泊の後出發の時は、自ら馬具、辨當を處理せられた。やさしき宮様が、一度馬上の人とならるゝや英姿颯爽、頼母しき限りであつたといふ。民衆の宮様今は亡し。

我々は秩父宮が地上に残されし其信、其行、生きた信仰と其生涯を我等に教へくだされし事を感謝し、佛徒らしく其美徳を忍びて、信行策勵に資したいと思ふ。

(淨土宗教學部長)

獄中の讀者より

ひとやに迎える八回目の正月、冷えるコンクリートの室。然し比島に、マヌスに、或はソ聯、中共に望郷の毎日を送る人と思ふとき、恵まれてゐる自分達を思います。

村田嘉久子さんの高熱冒しての放送後、倒れられし信仰の御述懐。状況こそ異なれ、ジャワにて死刑になるかどうかの時と同じような気持ちにて、淨土で再會を覺悟したものです。

頂戴した御誌は所内回覽後、比島に送つてやります。

東京都豊島區集鴨 集鴨ブリズン 山田 隆 元

名士訪問

かく思ひ、かく望む



亀井勝一郎

(評論家)

師走の午後、N、H、Kの高瀬氏の紹介にて、安居・斎藤は亀井氏と語る事が出来た。稍日本人離れした風貌、半白の頭髮、思慮深き目、自信の程をほめかしつゝ語る言々句々。これ等からは、氏の著書からは得られぬ数々を味はふ事が出来た。しばらく氏の言葉に耳を傾けて見たい。

私は浄土教徒だ

記者「先生は何時か眞野先生とラジオを通じ

て對談されましたね」

亀井「えゝ、一回やりました」

記者「今日は一つ、忌憚のない御見解を御聞かせ頂きたいと思います。」

今先生は何か原稿を書いておられますか」

亀井「創元社から出版される筈の佛教講座の原稿を書いている。東大の中村さん(中村元先生のこと、東大印哲助教授、文博)等と一緒にやる筈です。然し未だ先生に會つた事はないのですよ。」

「先生のなさる批評の根底となつてゐるものがあるのでしようが、それを一つ……」

「私は浄土眞宗で、親鸞の教を信じてゐる。

佛教はいろ／＼な藝術を生んでゐるが、浄土眞宗にはそれが何もない。眞宗的な信仰がそうした藝術を生まないのです。そこが私の好きなどころです。私はどうしても、何かを教へる場合これとあれと比較して見るくせがついてゐるが、蓮如上人の言葉に他を誹謗してはいけないとあるが、これは非常に優れたものだと思ふね。後のキリスト教もさうであるが、人間を中心として考へるにしても、すべての宗教がさうであるように無抵抗である。

それはプロテスタントのバリーションが變化したものであつて、浄土眞宗の無分別の分別もさうなので、對立關係にもつていくのではなく、對立をぎりぎりまで持つて行つて、これを止揚するものでなくてはならぬ。對立に執着してはいけないのであつて、無對立に於ける對立なのである。鈴木先生のいう無心ということもそこなのでせう」

記「キリスト教等どうですか」

亀井「キリスト教はその對立をぎり／＼のところへもつていかないうところに弱點があるね。現代の日本人もその通りで、駄目なところ

ろですね。いゝ意味で徹底してみる必要がある。分らないならば、分らないところまで徹底して見る。淨土眞宗の教は合理的には割り切れない。しかし、人間をみつめて、ぎりぎりの所まで持つて行くのはよいです。一般に佛教ではすでに救はれているということをいうが、私はこの言葉は嫌いで使はない。大乘佛教は救うべきものではない。カミユの考へ方を見ると現實を肯定し、人間の實相をみつめ、永劫に沈淪し乍らも、常に求めて行くとする考方があるが、非常に佛教的な考へをしていると思ふね」

東洋への郷愁

記「カミユは何か佛教書を読んでゐるのですか」

龜井「さあ、どうだかね。多分読んでいないだらうね。しかし御本人は東洋のものを讀んでいるかどうかは知らないが、プロテスタント、カソリック、共產主義に絶望して大乗的な考へ方に至つてゐると見られる。生の現實をみつめて絶望してはいけない。希望をもたなければならぬといつてゐる。このような考へ方はカミユの場合にも第二次大戰後に出てゐるのであるが、必然的にそこに到達したも

のと思はれる。東洋の知識人はヨーロッパを憶れることによつて東洋的となり、ヨーロッパ人はヨーロッパを強く憶れることによつて東洋的となる。君考へてみたまへ。立派な思想家は、大體最後には東洋に歸つて來て居るよ。そして、ヨーロッパには現在そうした東洋的なものに對する郷愁があるね。

宮本さん(東大の宮本正尊博士のこと)が送つてくれた議事録を見ても、イギリスによつて二百年、三百年と印度が抑へつけられて來たが、對立感情をなくしてゐるのは佛教的なもの、佛陀の精神が流れてゐるのであつて最後には彼らは必ず勝つと思つてゐる。日本の場合だと坊主が大分政界に出てゐるが、何をしてゐるのか薩張り分らない。廣川さんにしても石橋さんにしても、打つて出る立場をもつてゐない。一般にそうしたものに對する自覺がないのですね、何も彼等にはないのだよ」(笑)

日本のバックボーンは

記「日本のバックボーンといつたものについて如何ですか」

龜井「これが日本の基礎だといつて出すと、そればかりではない。こういうものもある。

こういったものもさうではないかと、忽ち十位集まつてしまふ。そこに混亂があつて洗鍊ということが出てくる。混亂のまゝで洗鍊がある。そうした中から生み出されて來るのだらう。だから今これと言ふのはない。

鈴木さんは混亂のまゝで洗鍊するこれを圓融無礙というといつてゐる。私は眞宗だからといつて別に宗派的に考へたり、書いたりしてはいない。自分の考へでやつてゐるのだが、鷗鳥さんにも會つて話したが、佛教は佛教という言葉を用いないで佛教を説かねばならなうと言つてゐた。私がやる文藝評論の場合もさうである。私は日常には觀音さまを信仰してゐる。三部經は讀めるが、常には讀んでゐない。私は現在の佛教は亡んだ方がよいと思つてゐる。しかし佛教そのものは決して亡びない。問題は現代の佛教が人生と現實に對して何ものもないということが僧侶の致命的なものであると考へてゐる。しかし若い坊さんで、こういうのはいけないと思ひながら、檀家というボスにしばられてどうにもならぬ、この混亂の中からいゝ坊さんが生れてくるであらうと思う。バックボーンが混亂の中から生れて來る様にね」

記「常に何か佛書でも御讀みになりますか」

龜井「私は批評をやっているから、常に維摩經を讀んで、それを私の思惟の場としている。菊池寛も十住心論をやっているし、一應の文士なり批評家は、大抵佛教はやっているようにすね」

自叙傳を書くことにつ

いて

記「先生が大宰治に特に關心をもつわけは、どこにあるんでしょうか」

龜井「大宰治はキリスト教の罪惡をあそこまでもつていつたからですよ。日本人の場合は大抵それを徹底しないからいけないね。その點大宰は徹していたね。」

・椎名さんもクリスチャンとして赤岩榮氏と一緒にやつているよ。しかしあゝした點まで行くことはどうかね」

記「武田泰淳さんなんか先生はどう思いますか」

龜井「仲々面白いと思う。大いに期待する一人だ」

記「文學作品を書いて見ようとは思いませんか」

龜井「思はない。私は十年ごとに自叙傳を書いている。まあ作品みたいなもので、今度五

十になつたら又書こうと思つている」

記「先生の愛讀者に聞くと熟し切らないうちに讀むから、先生の作品から抜け切れず、これから出よう出ようと努力するが、仲々抜け切れないといつていますね」

龜井「そんなことはあるもんか。たま／＼そんなのがあつたのだろう」(笑)

記「先生の批評は自信と、確信をもつてやつて居られるようですが」

龜井「自信とか確信とかは、一つももつてはいませんね。自叙傳を十年おきに書いていると、いつの間にか鬭争的なものがとれるに従つてだん／＼滑稽になつていく。年をとればとるだけ諷刺的にならざるを得ない。小林さんの批評等は最早禪であり、公案である。ほんと頭をなぐるようなものである。ほんとうに評論をやるものは自分の立場を全部こわしてしまつてからやらなければいけない」

印度に行きたい

記「今特に書きたいものは……」

龜井「私は佛教偉人傳を書いてみたいと思つている。さしあたり源信等書いてみたいね」

記「どんな立場ですか」

龜井「いや、別に立場と言ふのでないが、と

もかく彼にはよい所がある。そして印度には是非行つてみたい。そして釋迦がいた所とかネパール等にもね。歐米などよりも先ず印度だね。大思想發祥の地がみたいのだ」

記「ルナンのイエス傳の様に、そうした後に釋尊傳でも書いて欲しいですね。所で法然上人の考へはどう思いますか」

龜井「自己嫌惡の感の強い人で、親鸞が徹底していると言はれるが法然だつて一生獨身で通した程の人だから非常に徹底している人ですよ。念佛申さんと思いたつ心から疑惑苦が出てくるが、親鸞の場合は罪の意識をもつて安心してしまふ、惡くこれをすゝめるときよんとしてあとはたのみますとなつてしまつて危いね。三木さん(三木清のこと)の親鸞も仲々面白い。三木さんは生きていたら恐らく信仰に入つたろうと思ふね。この頃では吉川英治の親鸞がよい、これなんか出たとたんベストセラーになつてしまつた。何か宗教的なものを皆求めていたので、たま／＼親鸞が出たので受けられたのだらうがね」

記「先生はカミユ的な努力をする過程が信仰であると言はれていますか、カミユ的なものを立場としているのですか」

龜井「それでもいいと思う。他力というこ

とは結びつかぬ。人間は人間として悟るといふことはあり得べきことではない。カソリックの作家は姦通ばかり書いてゐるが、その人間の罪惡をもつて、神に奉仕してゐるのだね」

俺を批評出来ない

記「龜井論など書いたものはありますか」

龜井「まだないね。先ず書けないだらう。少くも俺を批評する爲には多くのことに通ずる必要があるからね。佛教、特に親鸞の教、キリスト教、コミニズム、文明評論、藝術評論等にね。だからイ、氣味だよ。

佛教に通じた人としては倉田百三が仲々やつてはいたがね。しかし少し頭が悪いので、ぐる／＼廻りしていたね。内村鑑三は頭はよかつたが煩惱や愛欲についてはからつきし駄目だね」

記「先生は酒好きですか」

龜井「あゝ。大いに呑むね」(笑)

記「呑み仲間は」

龜井「誰れかれの別なしに一緒に飲むね。しかし井伏さん(井伏鱒二のこと)等とは特に親しくのんでゐるね」

記「大分話が混亂して來ましたね。(笑)それではこの邊で。色々有難うございました」

秩父宮御墓所に參拜して

香山

成人の日、竹田復博士(元東京文理科大学教授)を訪れた折、先生は、この日の午前子供様方と宮様の墓所に參拜された様子を次の如く語られた。

「全く、秩父さんは、國民に親しまれた皇族でした。參詣人の多い事がその事を示しています。その質素な御墓前の飾りは、如何にも國民の皇族として、ふさはしいものですよ」

然し、先生は、更にこの事に關聯して、次の如き感懷をもらされた。

「それにしても、あの様に皇族の墓前を公開する事は誠によい事です。とかく今でも皇族と言ふと、別な世界に置こうとする事はいけません。例へば切角豊島丘を開放するのなら、序に、他の皇族方の墓所も開放して、國民に參拜の機會を與へたらよいではないですか。何も態々『立入禁止』の札を立てる必要はないと思ひますね。

私は思ふのですが、お盆とか、彼岸とかには、あゝした所を開放して、國民の皇室として、つまらぬ垣をつくらぬ事が必要であるかね。」

更に先生は、言を續けて、國民的宗教行事として、次の様な事を爲すべしと強張された。

「單に、こうした皇室の事をのみ國民的宗教行事とする事はいけません。例へば多くの同胞が或は戦争で、或は災害で、國の内外で犠牲になつて居ます。こうした人々に對してこそ、國民的な宗教行事として何かを持つ機會を與へるべきでないでせうか。特に佛教等は、こうした點にもつと力を入れるべきでせうね」

今更の様に私も深く考えさせられ、その足で、豊島丘參詣に向つた。

玉砂利を踏んで小高い丘を登つて行く道々、老若男女の夥しい人の群が行き歸りする。目を赤くはらしてゐる老母もいる。所々に「立入禁止」の札と、皇宮警官が立つてゐる。先生の言はれた事が思い出される。

奥まつた一角、已に萎れた生花の花輪にかこまれて、雍仁親王と木の薫りも新らしい角塔婆が立つてゐる。二、三流の黄、白の旗のみが、かすかに風にゆれて御墓所を飾つてゐるにすぎぬ。深く頭を下げる人々と共に冥福を祈つた私は、先生の言はれた感懷と共に如何なるものも、死の前には平等であると云ふ不滅の原則を、時代の働きの中に今更の様に感ぜずには居られなかつた。

戦後の歌人の中から新人と云われる人々をあけてみると四十歳前後であつて、明治・大正初年の有名人が大抵二十歳であつたのと比較する時、世人はどう言うだろう。現代人は力量がないからさあつさり断言する人もいるかもしれぬ。然しすくなくも短歌に關心を持つてゐる人だつたら恐らく歌人があまりにもおほすぎるからですと云うだろう。昭和二十七年版の短歌年鑑をみても、二百種以上の同人雑誌の一覧が出ていくらいだから短歌を誌上に出している人の数は少くとも五千人はいる事になる。そうなると新人の進出もむずかしいだろうが、現代短歌の評を書くのも並大抵ではない。今回からしばらく大家について述べる事にする。

名な人で戦後も活潑に活躍された人々を大家と名附けてみた。窪田空穂、吉井勇、川田順、土屋文明、松村英一、若山喜志子、四賀光子はいよいよ健在と云ふべきだが、一昨年あたりからくらべると齋藤茂吉、大田水穂、釋迢空（折口信夫）、土岐善麿は年齢的衰弱が出て來たのではないかと考えられそうだ。

○齋藤茂吉

「幼子の泣くこえ聞こ

ゆ母を呼ぶ

その聲きけ

ば母にこだはる」

はまだいいとして

「口も利かず我は居れども

をさなごの泣くこえ聴けば疲るる

ものを」

おぼろなるわれの意識を悲しみぬ

あかつきがたの地震ふるふころ」

人の世はこちたきこともありな

がら

おのづから過ぎて行かむとぞする

現代の短歌（二）

などになつてくると沈痛のひびきを讀者にあたえ、茂吉も老ひさらばへりと思わせる。かつてみちのくを二分けさまに聳えたまふ

藏王の山の雲の中に立つとうたい、終戦直後「今の歌壇、今の若いものなどに寸毫も顧慮することなく出來たものである。」と云い、更に「老人を罵つていい氣持でいるよるな今の歌壇に、何を言つたところではじまるまい。」と云つて、この言葉を證するが如く多くの秀作を残した茂吉も病庄に伏してしまい、今年は作品の發表も極めて少なかつたわけだ。今年は夏から岩波書店より茂吉全集がはじめたし、戦後でた「白き山」はあいかわらず歌人は研究の目標としているし、「ともしび」（戦前の再刊）は讀賣文學賞を得た。

それにしてもなる程近作は沈痛であるが、茂吉の歌は早くから大家らしい一種の諦觀があつたのであつて、その諦觀がますます内攻的にすすめられてゆかれていますのではあるまいか。白光のさす蕭々とした枯野のいしぶみに腰掛ていつてゐる老いたる騷客を見る様な感が私にはしてならないのである。茂吉の歌壇はますます深化されてゆくのだろうから茂吉の加筆を祈つてやまないのは私だけではない。あるまい。（28・1・24）

上木葉葉

（心の花同人）

○（前回正誤表）上段一行目現代短歌（短歌現代）中段八行目清宮敏子（清原敏子）下段二十三行目和歌を抒情詩として（抒情詩）（正（誤））

立體的涅槃パノラマ

讃岐の寢釋迦

細井照道

寛文といふ年は、徳川治政のもと佛教にとつて手痛いことの多かつた年である。

京都方廣寺の大佛が幕府の命で毀たれ、それが文銭に鑄かへられたのが二年。次で五年には、水戸光圀が領内の寺九百九十七ヶ寺を取り毀つて、不如法の僧三百四十四人を歸俗せしめたといふのであるから、當時の佛教界は、文字通りの戦々兢兢たるものであつたに相違ない。

こえて八年には、更に幕府から、新寺建立まかりならぬ。といふ示達が出て、折角工事中の寺さへ、さし止められたといふ弾劾ぶりであつた。

ところが二年後の寛文十年には、將軍家光の従兄弟であり水戸光圀の兄である松平頼重が、讃岐高松の南百合の郷に三萬四千五百坪の淨域を求めて工を起し、法然上人流謫の舊趾を移して、佛生山來定院法然寺と名づけたのである、然も三十三門二十四宇といふ宏大な佛閣僧房を建て、その落靈供養に、傳通院相閑和尚を招いて、中興の祖と仰いだので、邊土の僧俗は、等しく驚異の眼を見はつたわけである。

こゝに言ふ讃岐の寢釋迦も、その當時、時を同じくして作られたものと思はれ、境内諸

堂の中央に位するト方十三間の三佛堂——又涅槃堂ともいふ——内に、平素は秘佛として安置されておる、丈六金色の尊像は、背後上段の彌陀、釋迦、彌勒の三佛と相映じて、うす暗い堂内ながらそのあたりだけほの明るさを増して見えるのも有難い極みである。しかも年々新しくとり替へられてゆく四重の金欄の櫓の上に、右脇を下に肘を枕として安息のお姿は、人々に親しまれ易く、み胸のあたりの正や、み足の裏の金箔がいたく剝落して見えるのも、各々の惱みを除いていたゞきたいと願ふ心がそうさせたともおもはれるのである。

直後にある跏趺座の三尊は、文珠、普賢、觀音で涅槃に侍る菩薩の代表と見るべく、いづれも首を傾け俗に言ふ思案投首といふお姿である。

み足の許に停んで右手を上げて悲痛の格好をしておるのが耆婆とおぼしく現前のこの一大事に遭つて、さすがの名醫もこれ亦匙を投げた面持である。遙か上空には、白雲に乗つた悲母摩耶夫人が、勝音天子に導かれて、切利天より急ぎ闍浮提、跋提河のほとり沙羅林の下に降らんとしておるお姿が見られる。

堂の左右檀上には等身の遺弟十數人が、腕を擡げては泣き、打ちまろび悲泣慟哭しておる

者、或は佛陀が今しがた滅度に示された遺教を想ひ起して不滅の生命を感得せる如く頭に手をあて眼を閉ぢて黙止せる者も見うけられる。

その間、鳥畜蠕動の類はもとより、今は貼りかえられて見るべくもないが壁面に偲ばれる沙羅樹林の壁畫等、一瞬天地萬物寂として聲なき光景が境内の開けさとともに眞に迫るものがある、それは涅槃像を始め三佛、三尊の悉くが彫塑彩色で、繪像のみを見てきた者には一層親近感がいたゞけるわけである。

毎年舊曆二月十四、五の涅槃會には境内數萬の善男善女がひしめく中に隨喜僧による遺教經の讀誦、さては梵唄に和して稚兒天童が散華しつゝ世尊の像の周りを練り歩くさまは正に一幅の繪卷であり、この法要に會はんものと四國一圓はもとより瀬戸の島々の人々がうつし世にせめては淨土を夢みむと年に一度の開帳を待ち焦れておしよせるわけである。

總じて我が國には涅槃像にせよ來迎圖にせよ繪像、版畫の類は、さして珍らしいことではない。然し當山の如く山上來迎堂の二十五菩薩像に始り、祖師堂の歴代住持の像、十王堂の十王寺木彫極彩色、等身大といふに到つては、餘り他に類例を見ないといふも過言で

はあるまい。ただ惜しむらくは、作者不詳といふことであるが、然し凡人の作とは思はれないふしが所々に残つておることを見逃すわけにはゆかない。

開基頼重公は、先にも述べたとほり、水戸頼房の長子に生れながら、叔父の尾張義直、紀伊頼宣に俱に、世嗣が無かつたのを憚つて隠し子といふ憂目を見たのである。七年を経て弟光圀が生れた時は、叔父達に嗣子が生れてゐたので、當時の風習として光圀が水戸を嗣ぎ、自らは轉々として、最後は嵯峨天龍寺山内に預けられ、専ら佛道修行に勵み、その間當時有名な文化人とも交遊して藝術の三昧境にひたり僅にうつを散じたようである。

即ち陶工仁清の高弟理兵衛を始め漆器、彫刻等當時洛陽に名だゝる人々と特に佛教藝術に付ての研鑽も行はれたようである。

然し時來つて、高松十二萬石に封ぜられるや、彼等の技術をもともに讃岐に移入せしめて、遂には僅れの法然上人遺趾の復興に全力を傾注し、之等技術の粹を動員して、釋尊涅槃像を始め多くの佛像、佛具を作らしめたことが窺はれるのである。

いづれにしても、今に残る諸堂内部の天井欄間、合拜に到るまで、黒漆塗に金蒔繪を施

し或は欄間に雲龍、竹虎の精緻な彫刻を見せ特に馬場先黒門家根の瓦に到つては初代理兵衛の作と云はれ、彼が天龍寺時代に修練をしたであらふ信仰の烽火が、藝術を通して南海を光被し、流刑を恩寵と感戴して邊土教化に専念せられた老聖法然上人の遺風を今に顯彰した功は實に偉大と云はなければならぬ。「願はくは花のもとにて春しなむ、そのきさらぎの望月の比」と歌つた西行が、文治二年花らんまんの河内ひろかはの山寺で入寂したが、西行ならずとも、大聖世尊涅槃の頃にこの世を去りたいといふのが、お互佛教徒の悲願であらふ。ともあれ、嵯峨清涼寺の梅檀香木の釋尊像には及ばずとも、「嵯峨の立釋迦讀岐の寢釋迦」と並び稱せられるこの靈像を地上に残して、元祿八年四月十二日花降るころに七十四歳の生涯をとじた。

遙か國立公園瀬戸の島々を望む、佛生山の高臺に、寛文の彈劾にもめげず自ら工を督して建立した諸堂——たとえ昔日の面影は法くとも——をみまもりながら二百六十年、松籟の聲を念佛ときゝなしておることであらふ。

(讃岐法然寺住職)

芝 天 堂
 京 東
 寺 古
 辨 才 天 堂
 明 正 方 行

戦後、荒廢せる芝公園の中に、僅かに焼け残つた増上寺の立派な山門をくゞつて坂を上り、新本堂の右横を進み、小丘を越え、右に増上寺の焼跡を見て、小徑を下つて行くと、目の前に池が見えて来る。其の中に堂があり辨才天がまつられておる。これが現在、道路一つへだてゝある淨土宗、三縁山寶珠院に屬しておる辨才天堂である。

印度に於て、辨才天とは雄辯者、秀才者を言つたものだと言ひ聞いた事があるが、中國を通り日本に入ると、其れは福の神と仰がれて、今日に致つたもののようである。

この辨才天も開運出世大辨才天女、又は出世大辨才天と呼ばれておる。今その傳承を調べて見ることにしよう。

清和天皇の御宇（西歷八六〇―八七六）三井寺の開山、智證太師が入唐歸朝の折、洋上に於いて、俄かに波逆立ち、大暴風雨となり船は覆るかと思はれるばかりで、船頭、梶取り、唯手をあわせ聲を上げさまよい泣叫けぶばかりであつた。大師はこれを見て、あわれに思われ、海底に向ひ合掌をされ、「八大龍王下界の龍神、予が乗船を守護し給へ」と念ぜられると、今迄の荒天候は晴れ渡り、海上平砂の如くになつて光明赫々と輝き金色となつた様に見うけられ、その中に辨才天女、形を現じたまふたと言ふ。大師は信心肝に命じ、

歸朝の翌年に、彼の尊影を思い出しつゝ、江州竹生島にて十七箇日の間、丹精をこめて、一刀三禮、彫刻し給ひ、これを除波尊天と稱して、當時、大師に歸衣し給ひ事あつかつた

第六の宮、常陸の太守貞純親王に奉られた。親王は深くこれを信じ給ふた。

それより後六孫王經基公に傳わり、更に攝津守滿仲朝臣、源賴光朝臣より、義家朝臣迄三代の間代々累館に奉鎮し、平治の亂の起る時、左馬頭義朝朝臣累代の重寶とともに、是の尊天を右兵衛、佐殿に授け給ふたが、未だ若かつたので、藤九郎盛長を御使にて三井寺の膝遍阿闍梨の許に贈り置かれ、自分は亂軍の中に出で給ふたが、終に伊豆國に遠流させられ、しばらくの間は北條の館におられた。しかるに、清盛の不仁、平家の暴惡盛んにして諸民の苦るしきは大きであつた。

この時、高尾の文覺上人源家再興の大願を發し、是の尊天を護持して密に伊豆國に下り佐殿に謁し、往昔の事を物語り源家再興の旗上げを勧め奉つた。佐殿にも、ほのかに幼年の事を思ひ出し給ひ、尊天を禮拜して、大願を心に命じ、其の後、石橋山の初陣に木隠れの危難を逃れ、山木の判官を攻落されることとなつた、こゝに於いて安房上總の諸軍勢招かざるに隨ひ來て、六十餘州の民草なびき従つた。

これは尊天の擁護力であると考へられ鶴ヶ岡の傍に一字の祠を造築し奉幣祝詞を捧げ崇敬し給ふた。其の後執權家に傳り北條八代目最國寺平貞時、祖父最明寺時頼の宿意を繼ぎ諸國を巡つた時、この尊像を護持し、下總國にて、成阿了實上人にお逢いの節、上人佛門の幽玄を説き、

「この尊天は代々主君達、崇敬し給うものにて、今尙深くこれを敬信し奉つておるが今上人に譲り授けましよう」と、一首の歌をそえられた。

後の世の闇路を頼む法の師に

いさまいらする神の御姿

上人は始めて北條の君である事を知られたのであつたが、名乗らずに、其儘納受し、永く法孫に傳うからとて、

露の身は草は消ゆとも此神を

代々に傳えて衆生救わん

と歌はれた。

其の後了譽上人に授けられ、了譽上人は増上寺の開山である西譽上人に授けられることゝなつた。この西譽上人が實に山の開祖となられたものである。

觀智國師に至り益々尊敬をなし、御當家の御開運國家安全の御修法御祈願をなされた時

除波を改め「開運出世の辨才天」と仰ぎ給つた

其の後貞享二年生譽靈玄上人、台命を奉じて、當山の貫主となり給ふた。或る夜夢ともなく紅の袴を召され、白いかさねを召して戸に寶珠を捧げておられる出世辨才天が現われ、告げ給ふたと言う事に依れば、

「和光同塵の初めより三界の貧民をあわれみ八相成の昔より示現年久しく、今、時至れり、早く我れを當山の清淨地に移して仰ぎ祭らば有信の輩に貧窮のわずらいを忘れしめ、結縁の男女に無上の利益を與う」と。

上人夢さめて、不思議の思いをなされ今の地に社を造營されたとの事である。

寶珠院は戰災の中に残り荒れておつた内外も次第に信徒等に依つて復舊して來つゝある現状である。信者の中には戰前に於ては某染料會社の社長となられた方、某貴族夫人となられた御女中、又、軍人に於ても殊に海軍に於いて知名の將軍となられた方があつた。戰後は、A級戰犯に問われた某海軍大將の夫人が日參をなし、幸にして釋放された事等有り又舞臺人や神明、五反田、赤坂、築地等の藝者や女將、水商賣の關係者特に婦女子の參拜がさかんである。祈願も開運出世、福壽圓滿はもとより、男女の戀愛の取り結びから貸金

の回收等々様々である。熱心と思われる信者から參拜の感想を聴かせていたゞいた所に依ると、常に拜すれば開運出世福壽圓滿の朝日に輝き家門長久、子孫繁榮、志願に隨ひ願じて成就せずと言うものあらずとの事である。尙千餘年傳わる辨才天の御開扇は例年四月十五、十六、十七日である。

堂の前に立てば、冬は富士が見え、通り行く自動車を追つて左に目を轉ずれば、赤羽橋都電の便も悪くない。更に右に目を轉ずれば現在家らしきものも建つておらず、地をへだてゝ見る芝公園丸山の風景は自然美を造り都心近くにあつてこの様な風情を呼び起す所は他にも少ないのではないかと思われる。

「信ずる者は強い」と言はれて居るが、ゆかり深いこの辨才天への民衆の信仰は極めて厚い。然し今は四圍の廢墟と共に、荒れた風致は、長い歴史を持つこの辨才天堂を芝公園の片すみに放置している形である。そして世の多くの人にも、又この堂の由來や、沿革を知る者は少ない事であらう。

兎角歴史の中に置き去られ勝ちなこれ等由緒ある寺々を、われわれはもう一度見直ししてみる必要があるであらう。

隨土に親しむ老人

淨土宗ハワイ
開教主任 齋花 教道

無愛想な顔付で不自由な體を引きずりつゝ空地を活かして野菜を作り花を植え、時には怪しげな手つきで雜草を抜き乍ら、獨り恍惚と眺めて居る一老人がある。十年、一日の如き態度で。

月に僅か一回ではあるが、私は此の老人を見る毎に特別の親しみをおぼえる。老人もまた、私の行くのを、心から待つて呉れるようだ。

「おじさん！ 精が出ますネ」

『ハア！ お早うございます』

これが二人で交す毎月一回の定り文句なのである。

×

×

それは、一九三二年（昭和七）に、ホノルル市の一角にクアキニ・ホーム（日本人のみを收容する養老院）が建設され、其の當初からの入院者でWとゆう老人である。私が此の老人を知つてから既に二十年を越す譯だが、不思議なことに未だ一度もこのオジサンの笑顔を見た事が無い。また、見たいとも思わないのである。

私には、此の弱々しい年寄りの姿が、そして、常に土に親しんで恍惚としている相が、一種の尊とさをすら感じさせられて来る。

と此處まで書いた私は、讀者諸氏の爲に一言せねばならなくなつた。それは、養老院がやらせている仕事ではなく、「自然を愛し、草木を愛し、無意識の裡に自分を愛している老人自身の麗しい姿である」と言うことである。

×

×

立派な體格と凄く丈夫な心臓と達者な口とを併せ持ちながら、一向に體を動かそうとしない者が時には在る。こんな輩に限つて慾が人一倍に強いようだ。百姓も漁師も、教育家も法律家も、宗教家も政治家も、すべてのものが、物言わぬ草木や白蟻でさえ、精一パイの努力をはらつて生きているとゆう事實を、しばらく、素直に見なおしてみる必要があるのじやなかろうか。

×

×

部屋を飾る額面に浮び出た水々しいダリヤを見て、

「描かれた畫だから永久に枯れぬ」

と眺めるのは淺薄すぎると言わねばならぬ。いつ見ても水々しく而も、生き生きとして萎れない筈の花には、丹精こめて顔面に移し出した畫家の魂が生きている事を知らねばウソである。

×

×



阿彌陀經の話 (七)

藤井實應

「舍利弗、汝が意に於て云何、彼の佛を何が故ぞ阿彌陀と號したてまつる。舍利弗、彼の佛の光明無量にして十方の國を照らすに障礙せらるゝ所なし、是の故に號して阿彌陀と爲す。又舍利弗、彼の壽命及び人民無量無邊阿僧祇劫なり、故に阿彌陀と名く。舍利弗、阿彌陀佛成佛よりこのかた、今に於て十劫なり。」

極樂の主——こゝからは極樂の正報、即ち極樂の法王に在す阿彌陀

陀佛を讚歎せらるゝのであります。何故に阿彌陀佛というお名前であられるかという、そのみほとけの光明が無量であり、壽命が無量であり、また人民も無量であるから阿彌陀佛と申しあげるのであります。

光明無量——阿彌陀佛の光明は無量であると説かれてあります。が、その光明とはいかなるものでしょうか。それは恰度太陽が萬物を明るく照し、萬物を育てるように、阿彌陀佛の光明は十方の衆生を照し、衆生を攝取して極樂に生れ更らして下さるものであります。太陽の光に例えて、如來の光明のおはたらきを示すと、太陽の光線は萬物を照し明るくするように、如來の光明はあらゆる衆生の迷と罪のくらやみを照して明るくして下さいます。太陽の熱線が萬物をあたゝかくするように、如來の光明は、人々が「我」に執着して、かたくなり、つめたい心になつてゐるのを照して無我の暖かい心として下さいます。太陽の化學線が萬物を變化生成するように、如來の光明は、煩惱の身から、菩提の身に更生せしめ、如來の子としてお育て下さるのであります。

このような尊いおはたらきをして下さる如來の光明は無量であつて（無量光）十方の國を照し（無邊光）なにものにも礙えられるということのないお光（無礙光）であります。『無量壽經』には如來の光明を十二に分けて讚歎してあります。即ち右の無量光、無邊光、

無礙光の三光のほか、如來の光明はそれにくらぶるものもない絶對のお光である無對光であり、その光明は煩惱を燒きつくす炎王光であり、貪りのこゝろや、汚れや濁りを淨める清淨光であり、瞋りをしづめ惱をとがして歡びとする歡喜光であり、愚痴無明を照して佛の正智見を與えたもう智慧光であり、斷えず照して意志を靈化する不斷光でありまして、まことに思いも及ばぬ難思光であり、言葉にもいひつくせぬ無稱光であり、日月にも超えて何ものにも礙えられぬから超日月光である。光はそのまゝみ佛であるから無量光佛乃至超日月光佛として讃嘆されてあります。そしてそれに次で「斯の光に遇うものは三垢（むさぼり、いかり、おろかさ）消滅し、身も意も柔らかなになり、よろこびにみたされて美い心が生れる」と説かれてあります。『觀無量壽經』には、「如來の光明は遍く十方の世界を照して、念佛の衆生を攝取して捨てたまわず」と説かれてあります。法然上人はこの心を

月かげの至らぬ里はなけれども

ながむる人の心にぞすむ

と歌に示されたのであります。

壽命無量、人民無量——光明無量に在す阿彌陀佛はまた壽命無量であり、その人民無量であるから阿彌陀と名けるのであると説かれました。およそ生きとし生けるものゝ根本力となつてゐるのは壽命

であります。世間でも「生命あつての物種」と申しますが、萬の徳は壽命が本となつて持たれるものであります。生きとし生けるものは生きることが本質であります、そして人は誰でも生きるからには眞實に生きたいのであり、永遠に生きたいのが本來の願ひであります。阿彌陀佛の壽命は眞實にして永遠の生命であります。私どもの迷える生死を超えた不生不滅の眞實永遠の生命であります、それ故に無量壽佛と申しあげるのであります。釋尊のおさとりになり佛と成りたもうたのも、この眞實にして永遠なる生命、即ち阿彌陀佛と一つにおなりになつた境地を申すのであります。實に無量壽佛は釋尊成道の根源であり、釋尊の眞生命であり、また一切衆生の眞生命であります。それゆえわれわれは阿彌陀佛に歸命し、阿彌陀佛に攝取せられてこそ、眞實の生命は得られ、永遠の生命は獲られるのであります。

阿彌陀佛の壽命は、十方無量の衆生を光明に導き育てる爲の御壽であつてお慈悲そのものであります。光明無量であるから壽命もまた無量でなければなりません、そしてその光明の攝化（おそだて）をうける人民もまた無量であります。

光明無量——どこでも——こゝに

阿彌陀佛は壽命無量——いつでも——今

人民無量——だれでも——私

を導きたもう

阿彌陀佛は光明も、壽命も、人民も無量の故に、どこでも、いつでも

も、だれでも、そのお光におさめ、護り、導き育て（攝取、攝化）下さる、それゆえに阿彌陀と名けられるのであります。どこでも、いつでも、だれでもということは、こゝに、今、私と、うけとられるのであります。人々は阿彌陀佛をおがみ、その光明に攝められて眞に生きることができます。人々がかようにめざめて眞に生きることが、そのまゝ阿彌陀佛の生きたもうことでもあります。念佛が相續され、めざめ生かさるゝことを離れて、どこか別の所に阿彌陀佛が在すのではありません。空間的には一切衆生の覺醒となり、時間的には永遠の生命であられる阿彌陀佛は、現に私たちの眞實生命となつて私たちの上に生きて下さるのであります。念佛するところ直ちにその光明に攝化下さる活き佛であります。

十劫——阿彌陀佛は佛に成られて、ら今日まで十劫という長い歲月を経ていると説かれています。かれは阿彌陀佛が報身佛であることを示されたのであります。報身というのは發心修行して正覺と成り、信心念佛するものを攝化したもう佛であります。『無量壽經』にその詳しいことが説かれています。もとは國王であつた一人間が、世自在王佛の教をうけ、法藏菩薩となり、五劫の間、思惟して四十八の大願を發された、その第十八願には念佛申すものを必ずわが淨土に生れしめんと誓われた。そして長劫永劫の間の修行によりて大願成就した極樂を構え阿彌陀佛となられた。その成佛以來十劫にな

るといふ、一劫というのは、四十里方の大磐石を天人が三年に一度その羽衣で撫でる、その摩擦の爲に磐石がすりへつてなくなる間をいうので、とても對えきれない長い年月を申すのであります。阿彌陀佛は十劫以前佛となり、その間、今日の私たちの爲に淨土を建てゝ淨土に生れ来るを待ちこがれ給うている大慈悲のみ親であられます。

法藏菩薩の思惟修行の意が分らぬと申される方も多いのですが、これは釋尊の佛眼に映じた阿彌陀佛の世界を一般に分るようにお説き下された物語りとうけとつてよいと思います。物語といつたからとてウソではありません、眞實のすがたを物語りとして表わされたのであります。大事なことは私たちの信心念佛するものを直ちに攝化したもう報身佛であることを瞭解することであり、念佛申して光明のお育てを頂くことによつてその念佛の本願が成就されていることが、いよいよ明かになるのであります、實に阿彌陀佛は本願成就の報身佛であられます。

「又舍利弗、彼の佛に無量無邊の聲聞弟子あり、皆阿羅漢なり、是れ算數の能く知る所に非ず。諸の菩薩衆も亦復是の如し。舍利弗、彼の佛の國土には是の如きの功德莊嚴を成就せり。又舍利弗、極樂國土には衆生生ずる者は皆是れ阿鞞跋致なり、その中に多くは一生補處あり、その數甚だ多し。是れ算數の能く知る所に非ず。

但無量無邊阿僧祇劫を以て説くべし。」

極樂の聖衆——前に正報の主阿彌陀佛を讃歎せられたから、次にそのお伴である聖衆のことが述べられたのであります。聲聞は、佛の説法の聲を聞く弟子であり、菩薩は、自ら菩提を求め、他をみちびこうと願う求道者であります。聲聞も菩薩も數えきれぬほど多く、極樂國土はかような徳の高い聖衆によつてかざられております。また極樂世界の衆生に生れるものは、みな阿耨跋致（退轉しない境地）の菩薩であります、即ち極樂に生れる人は常に精進する菩薩で、退轉することはありません、皆不退轉であります。その多くはまた一生補處（佛の候補者）の菩薩であつて、やがて彌陀同體のさとりを開かれる方々であります。觀音、勢至、文殊、普賢、彌勒の諸大菩薩はこの補處の菩薩です。（極樂に生れた者は、此の大菩薩の友となることができて種々の法問も自在に學ぶことができるのであります。）その數は無量無邊阿僧祇劫かゝつたら説くことができるということです。ほと多いのであります。阿僧祇劫とは數えきれぬほどの長い時間ということです。

「舍利弗、衆生聞かん者は、應に發願して彼國に生ぜんと願うべし。所以は何ん、是の如きの諸の上善人と俱に一處に會することを得ればなり。」

發願——極樂の依報、正報の莊嚴を説き終られた釋尊は、舍利弗を

とおして一切の人々に呼びかけられ「衆生聞かんものは」と仰せになつて、「願を發して極樂に生れようと願え」と説きたもうたのであります。何故ならば、私たちの現實世界には、欲ふか、瞋り、愚かさ等三毒の煩惱があつて清淨な生活をする者は少い、然るに彼國は菩薩、聲聞等の勝れた善き人々ばかりで、その上れた善い人々と一處に會うことが出来るからであります。およそ此の世に於ても、よい人々とあうことのできるほどうれしいこと、有難いことはないであります。よい人々にあうことによつて、導かれ、ひきあげられて、よき人生に向うことができます。諸上善人俱會一處、よい人々と俱に一處に會うことのできる幸は如何ばかりであります。私たちが佛の教を聞き、同行相親しみ、相とけあうて心からの善き友となりあうことができたなら、それは淨土の一分があらわれたということができないでしょうか。極樂には諸の上善人と一處に會うことができる、故に淨土に生れたいと願えとの仰せであります。

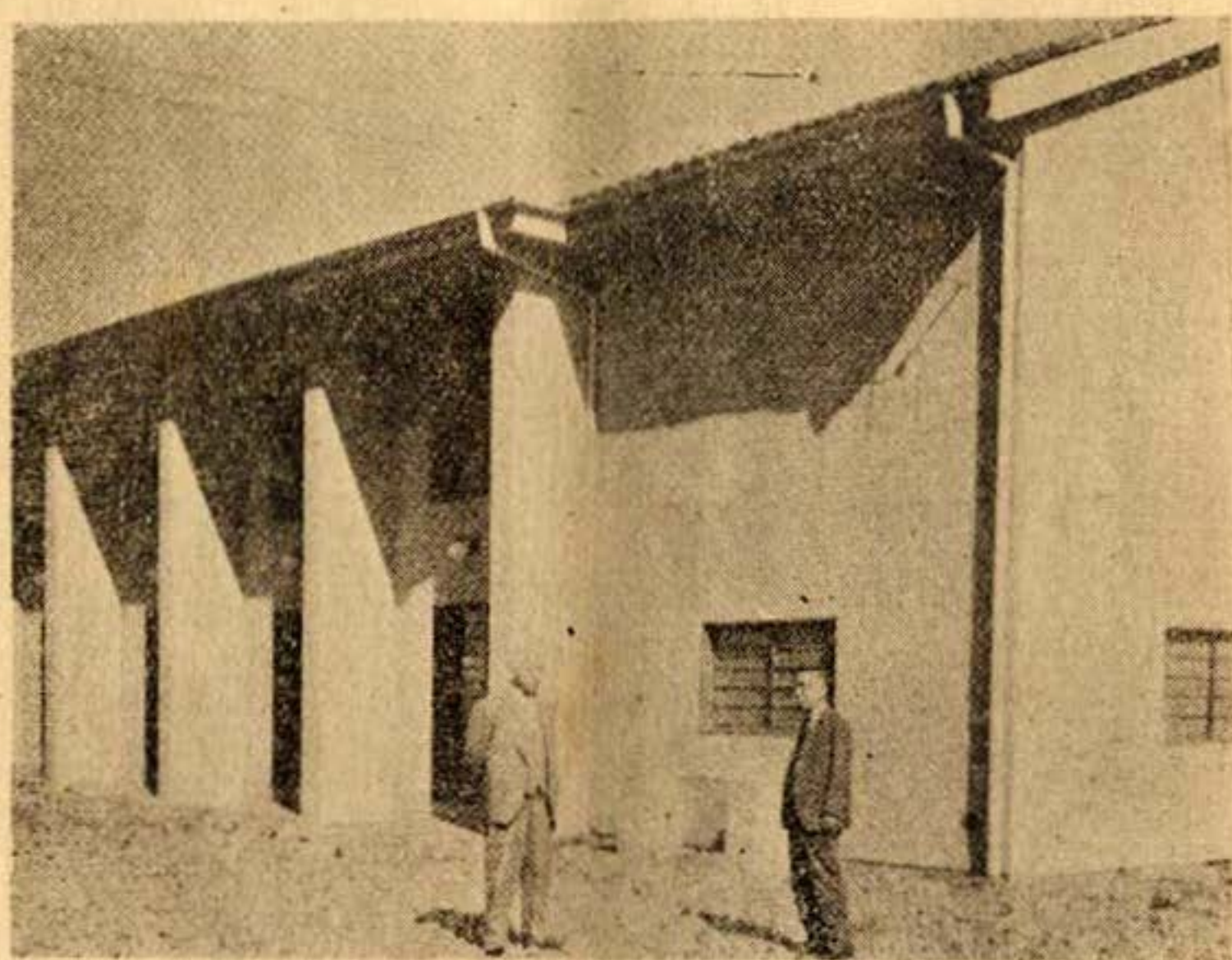
かように極樂の莊嚴を聞き、極樂に生れたいという願を發し、阿彌陀佛のことを聞いて阿彌陀佛の如くなりたいと願う、そこに念佛の心が發ります。この願は心の中心、心のドン底からの願いといえましょう。この願をおこし、この願に向つて進むときに、人生は、眞に生き甲斐を感じ、明るく精進することが出来ます。この眞實の願を發することによつて、しつかりした眞實の人生も確立するのであります。（つづく）

（淨土宗布教師）

宗教教育探訪

芝 高 等 學 校

—學校めぐり—



(講 堂)

戦後学校教育の問題は、餘りにも多い。中でも若い世代に對する宗教教育の沫殺は、アブレゲール

と言う肩書きを持つて青年を世に送る仕末となつた。従つて如何なる角度からこうした青年に、道德

かして、その道德的、宗教的情操を陶冶しているかを聞いてみることにした。最初は東京の芝高等學

的、宗教的な情操を附與するか

と言うことは、

教育者の大きな悩みであらう。

然し、この中

にあつてミッシ

ヨン・スクール

は、僅かに自由

な分野を持つて

いる。そしてこ

の中で、バック・

ポーンのある若

い人々が養はれ

育てられて巢立

つてゐる。編集

部はこうした點

に立つて、暫ら

く宗教に關係あ

る學校を訪問し

て、どの程度ま

でこの自由を生

校である。

◆ ◆ ◆
芝の森の中、都心には珍らしく

茂る木立に囲まれて長い歴史と傳

統に誇る芝高等學校及び中學校が

ある。都内數多くある高等學校の

中で、これありと知られるこの學

校の生態はどんなであらうか。

◆ ◆ ◆
言ふ迄もなく本校は淨土宗立の

學校として明治三十九年、元の淨

土宗第一學校を改稱して、「芝中學

校」としたのに始まる。爾來今日

まで約五十年、松濤賢定、荻原雲

來、渡邊海旭、藤田寛隨、大村桂

嚴の各名校長を経て、今日第六代

の中島眞孝校長に至つて居り、戦

後の六三制により、新たに芝高等

學校の設立となつてゐる。

◆ ◆ ◆
戦災に灰燼となつた校舎は、僅

かにコンクリートの校門を残すの

み乍ら、已にスマートな講堂も出

來て、着々充實されつゝある。現

在中學生七三二名、高校生四九七

名がこの校舎に學んで居り、二年

後には千五百名になると言ふから

大家族と言はねばならない。

正門を入つてすぐ左に、この校としてのみすばらしい職員室がある。うす暗い狭い部屋に四十五人もの職員が居るのであるから、全く大變である。「先ず教室から」と言ふ教育熱心がこんな所にも出てゐるのであらう。

部屋の中央に中島校長が窮屈そうに腰かけておられる。如何にも立派な體軀だけに、この部屋での行動は迷惑至極なことであらうと推察する。外柔内剛と言へる風貌が、部屋中を温く、而も嚴肅に調和を整へている。

「何かミッションスクール的な教育とか、行事とかをなさつていますか」

「いや、別に」
早速、問題の核心にふれて突込んだ記者の質問に對する答へは、誠にあつさりしていた。一寸背負い投げを食はされた形である。

「それでもね、このようなことをしているよ」

と始まつた説明が仲々長い。し

かも完全な宗教々育である。この校長は記者をウロ／＼させる人だ。その話によると先ず入學式當日から宗教々育が始まる。即ち父兄達をも前に置いて、本校の校訓である剛毅、敬虔、遵法、自治の訓話がある。この校訓をせんじつめて行くと、「淨土宗の信仰」となりこれを實踐するところこれ「念佛行」であり、この精神がこれ本校のモットーであると言ふ。又何をか言はんやである。(別掲、校訓解説参照)

この校訓の訓話はこれに止まらない。愈々授業が始まると校長先生自ら社會科を擔當して更に詳しい説明が始まる。單にその説明だけではない。これに伴ふ實踐行がある。即「坐り方」である。言ふならば學校式坐禪である。即ち正しい坐り方の指導と實行があるのである。今順を追つて之を照會しよう。

1、上體を前に倒しておこし、尻

校訓解説

中島 眞孝

「剛毅、敬虔」は渡邊先生の人物、風格を言い表わした言葉であり、「遵法、自治」は渡邊先生が親しく校訓として示された言葉である。

剛毅 剛毅こそは、眞にこれ男子の面目である。百折撓まず、一旦志を立てたならば、それを成し遂げるまでは、如何なる困難に遭うとも、それを破砕して行くだけの意氣を持たねばならない。この爲めには強靱なる身軀と強靱なる意志力とが強く要求される。

敬虔 總べての偉大なるもの、善美なるものに對しては、敬虔なる心を寄せるは人の自然である。我等は更に進んで、如何なる人、如何なる物に對しても、その人その物の本來存在する意義を考へて、それ相當の敬いの心を持たねばならない。この心はやがて我等を偉大なるもの、崇高なるもの、善美なるものとするであらう。

遵法 法に逆えば何事も成らず、法に遵つて始めて百事成る。これ宇宙の鐵則である。法に遵わずして事を爲さんとすれば必ず敗れるであらう。我等は須らく己を虚しうして如法に事を爲さねばならない。

自治 我等の自由意志は道德法乃至は宇宙の大法に自ら合致して働かねばならない。心の欲する所に従つて矩を超えず、法爾自然に生きることを目標として、我等は我等の自治能力を培養せねばならない。

をひく。

2、肩のこりをとく。

3、手を自然に重ねて組む。

4、胸を一たん張つて、一寸おとす。

5、下腹に自然に力がある。(入れるのではない。)

6、頭をあげて、あごを引く。

7、目は半ば開いて、鼻頭をみる

8、口を軽く閉じ、舌は上あごをさへる氣持。

9、深い呼吸をする。吸ふのは短く、出すのは長く。一分間一呼吸。

10、その呼吸を数へる。十迄。(たゞし數は問題ではない。そこに精神を集中するのである。)

「こうすれば君、健康が増進し頭がよくなり、心が静かで人物が立派になり、顔つきまでがよくなるよ」と。

全く豚兒達には、安くて効果のある薬ではある。一句の經文も知らず、一片の信仰心のないもので、こうした形の中に宗教的な情

懷が養はれて行くとは、まことに尊いことである。

「時々こんな坐禪みたいことをやるのですか」

「そうだね。餘り苦々しい顔をしている時等やらせるよ。いつの間にか明朗快活となるからね。ワッハッハ……」

恐ろしく大きく愉快そうな笑ひである。思はず記者は四圍を見廻はした。職員達は何事もなかつた様に仕事をしている。校長先生の笑聲は日中行事なのだらう。やれ金だ、やれ米だと騒いでいる世の人は、一度この坐禪は如何でせう。

こうした教育からはきつと立派な人が巢立つている事であらう。

流石に淨土宗立だけあつて、活躍する宗門人が多く出ている。第一この校長先生が第二回生である由。その外、長谷川良信、眞野正順、大河内隆弘、山本貫瑞、久保田量遠各氏が第四回、友松圓諦、里見達雄氏が第六回、最近では佐

藤賢順、同良智氏や栗本俊道、竹中信常氏等がある。

外部で活躍している人には、浦松佐美太郎(評論家)北川桃雄(美術研究家)川崎秀二(政治家)鮎澤巖(ユネスコ)岡田梯藏(岡田乾電池)玉置源一郎(玉置藥品)疋田一郎(寶塚理事長)不染鐵二(畫家)塚本嗣治(畫家)等錚々たる人々がある。全くたのもしき限りである。

今着々と校庭擴張が進められ、千五百坪の完成も眞近いと言ふ。

單に宗門興隆と言ふ狭い見からでなしに、更に國家社會の爲にこの學校が發展することを祈るのは、單に記者のみではあるまい。(Y)

淨土俳壇

高木晴子先生選

高木晴子

父母がありて 倅 初鏡

おだやかな 日々に母に 松の内

松葉搔き 移り冬日を 搔き移り

奥村青霞

大小の霜除 大は牡丹とか

佐藤牧山

仰ぎ見て 足をとぐめず 冬椿

中谷興瑞

通夜がへり 猫の戀にも 遭ひにけり

淡路しぎ江

これよりの 道はなか／＼ 草枯るゝ

佐藤初瀨

よべよりの 雨に美し 梅も早や

~~~~~

○今月より俳壇を設けました。

讀者の投稿を歓迎。選者高木

先生は高濱虚子先生の御令嬢

にて鎌倉で色々な會を御指導

中です。

○季題。山吹、春風(四月號)

新茶、麥の秋(五月號)毎月

二十日締切、送先、淨土編輯部



## 體内の灯

一瀬 直行

又この頃私は自分の年齢のことが、しきりと思はれる。この年になつたのにと、自分の姿を眼の前に据えて、何やかやと思ひ、惑ふまことにだらしないことだが、仕方がない。

今更にきまりきつた自分の年齢を思ひ浮かべてとかく惑ふのは、何より自分と云ふものが弱まつてゐる證據だ。自分に信頼のもてぬ時だ。もつともこの場合、自分のもつ歳相應の力量と云ふ點よりはもう一步突込んだ自分の存在自體、云はゞ人間それ自體にも懷疑的であるのだが、それはいくつになつても、どうすることも出来ない私にとつては、そんなしろものだ。

さうしたものゝ考へ方、云はゞ人間そのものにも常に懷疑的であると云ふ考へ方、そこには弱いとか、強いとか云ふことはない。たとえ絶えず炎をあげて燃え續けてゐる。私と云ふ肉體に濡れた紙をびつたりとはり付けたやうに、いくら洗つても、はがさうと爪を立てゝみても、消えるものではない。時には體内で消えかゝつたりすることはあるが、又猛烈な勢ひで火をふく。だからこゝで云ふ衰弱したとか、どこかに隙間が出来たとか云ふのは、もつと手前側の、生活の上のはりとか、そんな程度の單純な意味あひをさして云ふ。が

これを裏側から見れば、決して別個の存在ではなく、根は一つで、常に一つよりなく、お互が密接に引きつ、引かれつしてゐる。

來年は私も五十の歳を迎へる。そこまで來てしまつたが、いやに五十と云ふ歳が大きき、又痛くひゞいて來る。誰しも五十になつたかと思ふと、今更に過ぎ去つたことどもを振り返り、ちよつと足踏みのかたちで感慨にとらはれるのかもしれない。本當は自分の歳のこと等は忘れてすごせるのこそ、望ましい。それだけ仕事なら仕事に生命をかけて、夢中になれゝば仕合はせだ。それがいつも年齢に追ひかけられてゐるやうな氣になつたり、何かそこに壓迫感をおぼえるのは、種がゆるんでゐる證據かもしれない。が、私は元來年齢と仕事なら仕事と、密着させ計算するやうなことを好まない。つまり年齢に使はれるやうな生涯を送りたくない。出来れば、自分の歳のことなぞ突放しておきたいと思ふ。

それがあと一と月たらずで迎へる五十と云ふ歳が、しきりと思はれる。別に自分の歳におびやかされるとか、鞭うたれるとか云ふのではない。殊更に今日まで生きて來た、過ぎ去つたことどもを思ひ返してゐるわけでもない。たゞむやみと、眼先きの峠がしぼんで見

える。これはたしかに尋常な姿ではない。枯れてしまひたくないと思ふ欲念のはげしさをおぼえつゝ、反面この氣持を偽ることが出来ないのだ。

世間的に云へば、本來働き盛りの年輩だ。それかと云つて、私は身心共に疲れ果てたかと云ふとむしろ逆だ。だと云ふのに、一たんうすれた影を、色濃く浮かびあがらせることが出来ないでゐる。

長い生涯の一つの危機だ。さうしやれのばしてゐられない。これでも當人はもつと眞剣なつもりだ。一つことに情熱をもつてゐるものが出来なく、ものごとに感激を失つた。さうした云ひ方をすればさう解されても止むを得ないが、さうした外面的ならわし方ではなく、もう一つ奥にどうにも手のつけられぬものが、ふんぞり返つてゐる。どうやらこいつが私の生命を制するくせものだ。

矢張何と云ひわけらしいことを云つても、今日の時せいの壓力に負けたあげくの歎息にすぎない。二つの世界の、暴力的にまで攻め立てられたあげくの挟みうちに合ひ、たゞ無力な青白い手を振り上げ、救ひの手を差し伸べるにすぎない。それでは道ばたに捨てられたごみのやうな存在で、敗北の姿だ。だが、私は負けたくないのだ。と云つても、そんな素朴な感情的な表現ではどうにも救はれない。一つの解結にもならない。然し今日では、このきびしすぎる二つの流れを、見て見ぬふりやそこから逃げ出すことは、云はゞ自分の手をよごさずに生きることが許されない。私にとつて、たゞ明瞭なことは絶えず消されることなく、體内の灯を燃やすことだ。燃やし続けることだけだ。

私は日々なすことなく暮してゐる。が、私は決して吞氣に暮せる

身分ではない。月々の生活に追はれてゐる。又さう云つたからとて齒の浮くやうな云ひ廻しを好み、さとりすました中途半端さを好むわけでは、決してない。毎日なすこともなく、ぼんやりすごしてゐる。さう自分を表現して、多少とも謙虚に、あまり好ましくない解によつて、一日を塗りつぶしてゐる。

この頃よく酒をのむ。深酒をしては失敗してゐる。それも相手と共にのむのではない。いつともなしの金をさらつて一人のむ。話相手が酒の邪魔になる。一人酔つては勝手な思ひにふける。さうしてゐる間だけ一番自分と云ふ人間と間近に暮してゐるやうな氣がする。いつもにがい酒だ。無理矢理に自分を追ひ立てながら酒に溺れようとする。元來氣の小さなだらしな私に、酔ひの前にためらつてゐる。そこを叱りつけて、もつと自分を無くしてしまへと、泥のやうな溺れにかり立てる。そのくせ酒の力をかりる程、私は卑怯ではないと思ひ、深くつゝしんでゐる。全身に酔ひがしびれ、我ながら何を云つてゐるのかわからず、足元もあぶなく酔態の限りをつくしてゐるが、それでゐて、その下からまだきさまは、そんな手前側でまごまごしてゐるのかと、自分をあほる。よろける足を引きずり目の前にぼんやりうつる赤提燈の繩暖簾をくぐり、たゞ一人隅の方で昨日も今日も杯をなめてゐる。

日頃私は迎山に自分を語つたり、てらつたり、さては卑怯な自虐の淵におちたくはないとつとめてゐる。たゞ一途に體内の灯を消さずに、燃やし続けたいと、それだけのことを願つてゐる。(作家)

# お釋迦さまの鼻くそ

藤田寛海



京都の附近では二月の十五日に、お正月の餅花を煎つて佛さまに供へる風習がある。

また所によつては、お正月の餅を「あられ」のやうに細かく切つて用ひたり、蓬を入れた團子を作つたりする地方もあると聞いてゐる。今でも此の風習は残つてゐるであらうか。

これを「お釋迦さまの鼻くそ」と俗に言つてゐるが、「鼻くそ」はをかしい。多分「花供御(ハナクゴ)」とか「花屑(ハナクツ)」と言つた、お供へものといふ意味の言葉が訛つたのであらう。

そして、この「お釋迦さまの鼻くそ」をお供へする二月十五日は、お釋迦さまのなくなつた日であつて、佛滅日とも涅槃(ネハン)の日とも呼ばれてゐる。

「涅槃」とは、不生不滅のことであり、煩惱を脱して永遠の「いのち」を得るといふ意味である。竟り、この世での總てのはたらきを止め、この世から姿をかくされるが、然も生とか死を超えた絶対「生」の世界に到るこゝとも言へやう。

そこで此の日、所々方々のお寺では、お釋迦さまのなくなられる有様を寫した畫像、即ち涅槃繪や涅槃像をかゝげて法要を営むのであるが、これを涅槃會(ネハンエ)とよんでゐる。

はし近く涅槃かけたる野寺かな

山寺のねはん参りや晝さがり

涅槃會や鐵手合はする珠數の音

涅槃像さはり拜みし盲かな

仕事も手早やに片づけた晝さがり、年寄りも若いものも、目の不自由な人たちをも誘ひ合はせ連れ立つての賑やかなお寺参り。その人波は門前の道にあふれ、つい道端の畠までも踏み荒されてしまふ。

御冥加に畠ふまれつ涅槃の日

そして、庫裡の勝手もとは、お参りの人たちへの「お齋(オトキ)」の仕度で大騒ぎである。

膳をはこぶもの、小鉢を並べるもの、また庖丁で刻むもの。オヤ、隅の方では誰かし切りに水漬をすゝつてゐる。

こしらへて泣くや涅槃のからし和へ

だが、こんな騒ぎも日暮れには鎮まつて、たゞ夕煙りが總てを包んでゆく。

晝間のざわめきも、まるで嘘のやうな静けさである。あたりには、もう春の氣配もして月が明るい。

涅槃會や嘘を月夜となりにけり

むくげは今二葉なり涅槃像

牛の子の庭に出そむる涅槃かな

と言ふやうに、古い俳句にも寫された「お涅槃の日」が再びめぐつて来る。

さぞ、お参りの人たちで寺々は賑はふことであらう。

普通「涅槃繪」には、お釋迦さまの入滅を悲しむ此の世のあらゆるもの、人間は勿論のこと、天地も鳥獸も、そして魚虫と言つた、生きとし生けるもの總ての愁歎の姿が描かれてゐるのだが、たゞ猫だけがゐない。

それには、こんな話が傳へられてゐる。

この、お釋迦さまがなくなられるとき、天から一つの藥袋が舞ひ降りてきたが、傍の沙羅の枝に懸つてしまつた。これを見つけた一匹の鼠が、その袋の紐を切らうと木によち登

つたとき、下にゐた猫が急にとびかゝつて、その鼠を喰つてしまつたので、藥も間に合はずにお釋迦さまはなくなられたのだと言ふ。そして、そのためにお涅槃の繪には、この不屈な猫どもを描かないのである。

たゞ、兆殿司の描いた東福寺の涅槃繪だけには猫がゐる。

と言ふのは、これも初めは猫を加へずに描いてゐたが、途中で繪具がどうしても足りなくなつてしまつた。大變困つて思ひ患つた末ふと、いつもいつも側で熱心に見てゐた猫に向つて、「この足りない繪具を捜して來たら、お前もこの繪に加へてやらう」とつぶやいたところが、その日から急に猫の姿が見えなくなつてしまつた。そして數日へた或る日、繪具をくわえて歸つてきたので、約束通りに猫を加へたのだと言ふ。

霞む木に藥袋やねはん像

涅槃會や木に後の世の種袋

舌吐いた牛の歎けるねはん像

わが好きな猫がをらぬや涅槃像

お寺に参つてお涅槃の畫像を拜むとき、去

年の、また一昨年の此の日と今とを想ひ比べて、過ぎ去る月日の速さや世の中の推移のあわたしさに、驚きの目を見はる人もあるであらう。

好ましからぬ猫の姿は描かずに済まされやうとも、苦々しく想ひながらも、尙ほ生きねばならぬ人の世の住みにくさをかこつ者もあるかも知れない。

だが兎も角、昨年から今年へと、その住みにくい人の世を大過なく生きぬいて來たことは大きな喜びといはねばなるまい。

顧みて悔いなき人は更に幸せである。

(山形大學助教授)

### 三月號予告

心の温まる話

吉田絃二郎

彼岸

佐藤良智

海外生活の思い出

眞野正順、友松圓諦、中島眞孝、松濤誠康、松本徳明、吉岡義豊

地藏信仰と念佛

星野俊英

四國紀行

佐藤治子

民間に於ける年中行事の中で、節分の豆まきは春の訪れと共に切つても切れぬ催しである。

この節分のことは追儼（おにやらひ）と言はれている。即ち「鬼をやらふ」「疫鬼を追ひ拂ふ」と言ふことである。柊の枝に鰯の頭をさしたものを戸口の所にさし込むのは、消極的な鬼の侵入に對する防禦法であり、「福は内、鬼は外」と豆をまくのは積極的な戦闘法であると言ふ事が出来よう。

元來この追儼の行事は十二月晦日になされたようで、日本で最初行はれたのは文武天皇の景雲三年（西暦七〇六年）諸國に疫病が流行した際であると言ふ。これは言ふまでもなく中國から傳來したもので「周禮」と言ふ古い儀式を記録したものにこのことが記載されている。日本の古くからある行事の殆んどが、中國から來ている事は誰も知つてゐるであらう。

所が何時の間にかこの行事も、

立春の前夜に行はれるようになってたもので、又當初禁中の行事であつたものが、何時しか民間行事となり、今では民間になくはならぬ春の行事となつてしまつた。そして子供にとつては楽しい家庭行事であり、大人にとつては思い出深い年中行事として、今尙盛んに行はれてゐるのである。

さてこの時に豆をまくことは、



## 鬼はどこに

社佛閣が仲々盛大に、笛や太鼓の宣傳宜しくやつてゐる。元來この豆をまくのは年男の役であるが、この頃では有名人をかき集め、名士、力士、俳優からさては女優、藝妓までが年男いや年女(?)として、大衆にバラ／＼と豆を撒くようになった。これでは逆に世の色氣ある男鬼共が、近寄つて來るとだらうに。世の中も随分變つた

である。

こうした折に、靜かに一體この鬼が何處にいるかを考へてみたらどんなものか。且つて戦時中敵米英を「惡鬼」と呼んだ。所が今日この鬼共が大きな顔をして大道を歩いてゐる。なれた猫の様な日本人がこの後を追つかけてゐる。ヤソキー（洋鬼）と言ふではないか。逆に中國人の作品を見てゐると、日本人を洋鬼と言つてゐる。全くお互様と言ふことになる。

然し一體鬼と言はれるものは、何處に居るのであらうか。英米人か、日本人か。家の外か内か。私の外か、内か。ともかく胸に手を置いてみると、年の數だけの豆を食べる前に、この豆で體内の鬼を拂い出さねばならぬのでないか。節分會は全く面白い行事である。

(Y)

○ ○ ○

○ ○ ○

近時この行事は、有名無名の神

「魔滅」と言ふ事に關聯して、「病魔」「惡魔」を亡ぼすのだとされる向もあるが、どうも附會された意味のようだ。然しこの事が迷信であらうと、正信であらうと、人間は内にも外にも、多くの鬼を持つてゐるのだから、大いにこの際鬼共を追ひ拂ふことは望ましいことである。

と言へば變つたものである。

成田山の節分は大した人出であると言ふが、昨年もN、H、Kがこれを現地放送せんものと出掛けた所、愈々放送となる頃、大衆が豆撒き臺に押し寄せて滅茶苦茶の騒ぎとなり、アナの聲も通らず、唯ガア／＼と言ふ騒音のみの放送となつたと言ふ。丸で鬼そのものの人間相が出現してしまつた次第

# 小説 吉

## 水 (七)

東山未知夫



### 身業説法

時國公を討つた源内武者定明は決して本懷を遂げたわけではなかつた。

定明は、日頃からの時國公の慢心を遺恨に思つていた。寢ても覺めても、定明の腦裡には、この遺恨のわだかまりが去來していたのである。

「憎つくい時國め」

四六時中、この遺恨の情が定明の五臟六腑を音を立てゝ流れていった。

「遺恨、々々、々々、」

いくら拂つても拂い落すことことの出来ない、執拗なわだかまりとなつて、この遺恨の情が、常に定明の身邊に纏わりついている。

遺恨の情そのものが、定明を縛し、囿ますところの惡魔の影とな

つて、定明にくつついてしまつたのである。

「このような遺恨の情から早く逃れたい。」

定明は、遂にこのように考えるようになった。

こゝに、定明の心理的な飛躍がある。しかしこの飛躍を定明自身も氣が付いていない。勿論定明の家來たちはそのような飛躍などには氣が付く筈もない。

定明の心理的な飛躍、われわれは一應これを取り上げて見なければならぬ。

最初、定明が惱んだのは「時國が存在する」ということであつた。即ち時國公そのものを憎んだのである。

「憎つくい時國め」

この場合、憎いのは時國である。この「憎い時國」が、しよつちゆう定明を惱ますのである。定明はつねに、この「憎い時國」に繋縛されているのである。従つて定明は四六時中この「憎い時國」の幻影



松

に悩むのである。

さて、

定明が、

「憎い時

國」の幻

影に悩む

というこ

とは、定

明が時國

を遺恨し

ているこ

とそのこ

とである

詳しく云

へば、定

明が遺恨

するとい

う仕方

で悩んで

るのであ

つて、遺恨するということに對しては悩んでいないのである。かくして、最初の場合には、定明が、「憎い時國」の存在を悩むことゝ遺恨することゝは同一であつたのである。即ち「悩み『即』遺恨」だつたのである。

ところが、後程の場合の定明の悩み方の性質が變つてくるのである。即ち後の場合では、「憎い時國」の存在を直接に悩むのではなく「憎い時國」の存在を悩むところの自己の遺恨の情に悩んでいるのである。悩みの行く先は、時國に對してではなく、自己に對して向けられてゐるのである。

「このような遺恨の情から早く逃れたい。」

遺恨の情の持主は自己である。従つて自己が遺恨の情を持つてゐるということ、換言すれば自己が遺恨に執著してゐるということに、實は定明が悩んでいるのである。

こゝに於てわれわれは、定明の心理的な飛躍に於て、遺恨に對する定明の悩み方の變化を見ることが出来るのである。飛躍の以前に於ては、むづかしい言葉で云うならば、定明の遺恨はアン・ジッヒな遺恨である。飛躍の以後に於ては、定明の遺恨はフュア・ジッヒな遺恨である。遺恨を自覺し、その遺恨に「對して」悩んでいるのである。

さて、定明の本懐とするところは、このような「悩み」を撥無し心を晴らすことである。心理的飛躍以前の定明ならば、「憎い時國」

を討取ることによつて「惱み」を端的に撥無することが出来たであらう。しかし、心理的飛躍以後の定明にあつては、時國を討取ることによつては「惱み」は消去されない。否むしろ、時國を討取ることによつて、反つて定明の「惱み」が増大する筈である。なんとなれば、時國を討取るといふことは最も大きな遺恨の執著であるからである。

「時國を討取るとは、ます／＼わが惱みを大きくするばかりじや。」

と定明が氣が付いたのは、しかし餘りにも時が遅すぎたのである。定明がこのことに初めて氣がついたのは、あの、時國邸への夜討、自身の眉間の負傷、逃走……すべて再び戻らない歴史の一齣々々が廻轉され終つた後であつた。

かくして、再び冒頭の文章にもどるのである。即ち……

時國公を討つた源内武者定明は決して本懷を遂げたわけではなかつた。

定明は、時國公の館を襲つたその夜、眉間の疵の痛みをおさえてこつそりと自が邸を抜け出たのである。

行く先は、妻子にも、主だつた家中の者にも告げなかつた。否、定明は、豫てから、逃げて行く先を準備していたわけではない。こつそりと時國公を討つて、知らぬ顔で通すつもりだつた。ところが眉間に矢疵を蒙つた今となつては、もはや知らぬ顔で済まされぬ破

目になつた。眉間の矢疵のことについては、勢至丸母子が知つてゐる。又當夜、その事態を目撃した時國家の殘黨も知つてゐる筈である。しかも、一度びこの噂が立てば、國內の百姓達も、眉間に矢疵のある男が誰であるかを容易に見別けることが出来るであらう。

「逃げるより外はない」

こう決心したのは、従つてその當夜に於て、矢疵を受けてから以後の事である。自分の身をかくす當ては、無いこともない。しかし、いずれも自分の縁故の家ばかりだから、後で時國公の親類の者によつて搜索される場合には、襲つるをたぐるように、しらべられる危険がある。

「誰れも知る人もない他國へ、足の向くまゝ逃げるに限る」と定明は心を決めた。

「何處へ行くとも判らぬ。隠れる場所に落ちついたならば、密かに傳絡しようぞ。」

これだけの言葉を家中に残して、定明は急いで跡を絶つたのである。

\* \* \*

人跡を斷つた岩間の木立の間に一字の寺がある。その寺の前を、筋の谷川が流れている。岩間からしたゝり落ちる水を集めて、清らかな流れとなつて下流へと落ちて行くのである。その谷川の畔に、形ばかりの菴が最近になつて見られるようになった。

この寺の住持の話によれば、眉間に怪我をした一人の旅人が、谷川で疵をすゝぎつゝ、疵の保養をしているとのことである。

この菴の住人は、まぎれもなく定明である。定明の心理は最早や飛躍以後の状態どころではなかつた。「遺恨」が「懺悔」に變貌してゐるのである。定明の心の疵の變貌とともに、彼の眉間の疵もすっかりよくなつてゐる。人跡稀れな山寺の山域とはいへ、時には人々の聲や馬の蹄の音が聞こえて來ることもあつた。その度び毎に、定明の心が騒いだ。

「すわ、時國方の反報ぞ！」

しかし、今の定明の心は、靜かに落ちついてゐる。已造の罪の懺悔生活に入つてゐるからである。

家中との密かな連絡によつて、彼は時國公の往生のことも、又その臨終の際に勢至丸に與えられた遺誡のことも知つてゐた。

「私は間違つてゐた。讐に報いるに讐を以てしたのである。」

「私と時國との關係は、ます／＼深い迷いの淵へと陥ちて行くところだつた。いや、その迷いの淵へと私が誘つたことになるのだ。」

「この迷いの淵から、時國が救つてくれたのだ。」

「時國が、この迷いの淵から互いに救われることを、身を以て私に説法して呉れたのだ。」

定明は、已造の罪を悔いることによつて、己れの救われる道へと新しく一步を踏み出した。否、己れ一人ばかりではない、己れの家

中のものも、すべての人々も共に救われる道へ——み佛の道へ——と進んだのである。

「勢至丸は、きつと佛門に入るだろう。」

「そしたら、勢至丸はきつと立派な教化者となるだろう。私の子供達を必ず勢至丸の弟子にしよう。」

「そうして、勢至丸の遺されたみ佛の教を私の子供達に受け繼がせ實踐させよう。」

「元來、仇と仇との繰り返しによつて縛られねばならなかつた時國の子孫と定明の子孫とが、時國の一身を賭けての身業説法によつて、み佛の教を媒介にして互に助け合い、救われて行くのだ。」

心持ち瘦せたように思はれる定明の姿は、しかし餘い光を放つてゐるように見えた。定明の白い着衣は、初夏の光の中で、いかにもすが／＼しく見える。庵の戸口には、前の谷川から汲み上げたのであろう。清らかな水をたゞえた闔伽桶が置かれてゐる。その桶の中に浮いた時おくれの春の野草の花びらが、夏の太陽に當つて靜かにゆれてゐる。(つゞく)

## 讀者の聲

○御佛に仕へさせて頂きますことによりまして、日々、安樂にくらさせて頂いて居ります。今後ともよろしくお願いいたします。

福井縣大野町 羽生孝榮

○御誌拜讀させて頂き、布教に、児童教化のために、大變役立たせて頂いて居ります。今迄の發行目錄（トラクト類）がありましたから御送り頂きたいと存じます。

千葉縣 館山市 福田眞教

○毎度有難く存じ。正月號は優秀でした。會員にすゝめたいと存じますので追加送附願ひ上げ。

神奈川縣 葉山 杉田義從

## 芝園だより

○「岩ばしる垂水の上のさわらびの萌え出ずる春になりけるかも」とは好きな萬葉古歌だが、仲々どうして本格的な寒さはこれから。アイクの就任と共に激しい現實の轉變がある事であらう。一人の聲で世界は動く。全く地球も狭くなつたものだ。

○兎角宗教談義は現實と遊離し勝ちだ。本當の信仰は生々しい、激しい人間生活と共にある。本誌も何かそんな缺陷がある様だ。自己批判々々。六月號頃に「働く人と信仰」と言ふ特輯で、正面から現實と相撲をとつてみる積り。

○連續企畫として、名士・寺・社會事業訪問をします。讀者もこの種のものについて、是非御投稿を。龍海は片目を潰して、本と人を傾めに見ている。下手すると車のしたじき。お蔭でこちらは仲々多忙。編輯の困難さを味はつた次第。勿論大分よくなりつゝありますから、御安心を。（安居）

○新築成つた隆崇院書院に於て、昨年最後の總編輯會議を開く、密雄・良智・竹中各氏、安居・齋藤他に今度から參加の毎日新聞の杉本君といふ所。賢順先生は御不快大橋君も同じく缺席。スタッフの充實とともに編集會議も一段と輝いて来る。名論縱横、意氣大に上る中、一向に上らないのは小生の馬力で、眼をやられ醫師の嚴命にて、喫まず飲まず懺然。

○目の方は當分酷使に堪へず、何かと各位に御迷惑をかけますが御許しの程を。何分商賣道具の事で十分手當するつもりです。當然、重荷は安居へ。彼、つらく云つてます。目の仇とはこの事。

○中村孝也博士を見舞ふ。長い學究の道程に辿りこられし信仰の物語美はし。御回復を祈るや切。

○藤田寛海氏事務所に表はれ、何かと編輯への御注意。

○正順、おかげで昨秋來規則正しい書齋生活にて元氣です。（龍海）

## 原稿募集

創作（短篇、四百字、十枚）  
童話（連續、三十枚）

宗教味豊かな明るいもの  
○毎月二十日まで編輯部に

○掲載のものに薄謝呈上

誌代 會費半々年二百圓、一年四百圓（〒共）。毎號定價三十圓（〒四圓、前金切次第清算通知申上げます。確實便利な振替を利用して下さい。

「淨土」 二月號

昭和十年五月二十日  
第三種郵便物認可

昭和廿八年一月廿五日印刷  
昭和廿八年二月一日發行

（定價三十圓）

編輯兼 眞野正順  
發行人 眞野正順

印刷人 春山治部左衛門

印刷所 共立社印刷所

發行所 法然上人續仰會

東京都千代田區神田保町三ノ十  
東京都港區芝公園五ノ一〇  
電話 東京八二一八七番  
芝（四三）一三二八

# 大正大學學生募集

## 學部・大學院

### 募集人員

大學々部 二〇〇名 大學院 四〇名

### 學部學科

佛教學部 佛教學、梵語學、淨土學、天台學、眞言學、哲學(東、西)、史學、國文學、米英文學、社會學、社會事業

### 夜間授業

佛教學、日本史、國文學、社會學の各專攻、文學研究科(佛教學、宗教學、國文學各專攻)

### 大學院

第一次 二月二日—三月五日

第二次 三月九日—四月九日

第一次 三月六、七日

第二次 四月十、十一日

### 入試科目

大學—國語、社會、理科、外國語

大學院—論文、外國語

### 認定試験

(舊制中學卒業者の大學入學認定試験は三月五日)

### 特典

本學独自の獎學生、淨土宗獎學生、日本育英會獎學生、宗門僧侶資格、教員資格(社會、國語、英語、書道、宗教)社會福祉主事資格

## 高等學校(夜間)

### 人員

第一學年(二〇〇) 他學年若干

### 試験

一次・三月二十二日 二次・四月十九日

入學案内は二〇圓及び八圓切手貼布宛名記入の封筒を同封して申込むこと

東京都豊島區西巢鴨四丁目(都電・バス・西巢鴨下車)

昭和十年五月廿日第三種郵便物認可(毎月一回一日發行)  
昭和二十八年一月廿五日印刷 昭和二十八年二月一日發行

第十九卷

二月號

定價金三拾圓(送料)

○發刊以來、施本、淨土の集ひ、等の講話テキストとして、手頃のものだと好評絶讃です  
○淨土の教を知るのに、これほど要を得て簡なるものは、今までにありません、各信徒一本をお備へ下さい

### 淨土編輯部編

淨土トラクト

## 信徒必携

B六、十六頁 價十圓送八圓

○目次一、ほとけさま(阿彌陀佛・觀音勢至・極樂淨土)二、みおしえ(法然上人・三部經・念佛・往生)三、おつとめ(佛壇・珠數・木魚・けさ・法衣・合掌禮拜・十念・燒香・墓參)信徒のことば  
●五十部以上一割引、百部以上二割引

文學博士 深浦正文著

## 佛教文學物語

上卷 二〇〇圓 下卷 二五〇圓 送料 各二四圓

夢原湖星星著

## 問いに佛教を語る

價 一五〇圓 送料 二四圓

深浦正文著 大原性實著

## 現代宗教的疑問の解答

一、二、三、四輯 各百圓 送一六圓

京都市下京區花屋町西洞院西入

永田文昌堂

振替京都936番

法然上人鑽仰會